

幼少期のスポーツ経験とその後の運動習慣やスポーツ指向性との関係

藤田 弥空（東京学芸大学）

1. 目的

本研究の目的は、幼少期のスポーツ経験が中高生の運動習慣やスポーツ指向性にどのような影響を与えるのかを調査することである。さらに、その結果を分析することで、生涯にわたって運動やスポーツに親しむための資質能力を育むことに資する、保健体育の授業のあり方を検討する。

2. 方法

- 1) 対象者：都内N中学校に通う中学2年生の生徒156名ならびに、都立S高等学校に通う高校2年生の生徒320名。
- 2) 調査方法：幼少期のスポーツ系の習い事経験と、現在の運動習慣、スポーツ指向性に関するアンケートを実施した。また、家庭環境の違いが幼少期の運動機会に与える影響については、中高生を対象に行ったアンケート調査の結果や、公的機関が行っている調査結果をもとに考察した。
- 3) 分析方法：アンケートの統計処理には、統計解析ソフト SPSS24.0 を使用した。公的機関が行っている調査には、ベネッセ教育総合研究所の調査結果を利用した。

3. 結果と考察

幼少期のスポーツ系の習い事経験によって、幼少期時代に獲得した運動好意感が持ち越され、中学生や高校生現在の運動好意感、運動習慣に影響を与えていることが示唆された。さらに、運動好意感と運動習慣にも関係性が見られ、運動が好きな生徒は、運動が嫌いな生徒に比べ、日常的に運動をする習慣がより身に付いていることが分かった。

また、幼少期のスポーツ系の習い事経験の有無が与える、現在の運動、体育に対する好意感や運動習慣への影響は、中学生の方が高校生に比べて大きいことが示唆された。これは、中学生は、幼少期のスポーツ系の習い事経験によって、運動機会が大きく左右され、運動好意感に影響を与えているということが推測される。その反面、高校生は、幼少期のスポーツ系の習い

事経験だけでなく、中学生時代の体育の授業や部活動の経験も、運動、体育に対する好意感に影響を与えていることが推測できる。

また、幼少期のスポーツへのアクセス機会については、親の運動嗜好や運動への意識が影響していることが考えられた。ただし、運動好意感とは、スポーツ系の習い事を自分から主体的にやりたいと思い、習い始めた子供の方が他者の影響を受けて習い始めた子供よりも得られやすく、子供自身のスポーツに対する主体的な姿勢も、家庭環境とともに大切であることが示唆された。

さらに、幼少期のスポーツ経験には、スポーツサービスの市場化が進み、受益者負担の割合が大きいことが分かった。幼少期においては、学校外活動費においてスポーツ系の習い事に占める割合が大きく、家庭の経済状況が、幼少期のスポーツ活動に影響を与えかねないことが推測できる。そのため、子どものスポーツ活動にかかる費用は、世帯年収が多い家庭の方が多く、費用負担についても、負担が重いと感じる家庭は、年々増えている。一方で、中学生、高校生になると、学校の部活動にスポーツ活動の場はうつされる傾向が見られた。

4. 結論

調査の結果、運動好意感には、持ち越し効果があることや運動習慣に影響を与えることが考えられた。そのため、中学生、高校生が生涯にわたって運動やスポーツに親しむためには、学校体育において、運動の時間をより多く確保し、運動好意感を育むことが求められる。さらには、スポーツへの主体的な姿勢を育成することで、運動好意感をより高め、運動習慣を身に付けることにつながれると考えられる。

<参考文献>

- 1) 高橋功祐(2020)幼少期の運動がその後の運動に与える影響についての一考察~持ち越し効果を中心として~, いわき短期大学研究紀要, 53:1-14
- 2) 清水紀宏(2018)子どもの貧困と体力・スポーツ格差, 子どもの発達と発達, 16(1):17-2